

顧 み て

森川 輝紀

はじめに

定年が近づくにつれ、私の我儘に今なお付きあってくれている卒業生に、こう言われることが多くなりました。「最終講義はいつですか？是非連絡ください。聴きに行きますから」「えー、最終講義などというものは、大学者が重厚な研究の蓄積と展望を、そして少々の感慨を若き学徒に語るもので、“教授”という名に恥ずかしさを感じている私などが行うものではないのだよ」と応じていました。ついでに、どうしてまた最終講義なのかと問うと、彼等はこう応えるのです、「何（十）年も先生と一緒にしていますが（心ならずも？）、先生の本当の専門が何なのか知らないし、キチンとした講義を受けたことがないので、最後に一度は聴いてみたいもので」と。実際、卒業生達は、我が子に「森川先生は、何の先生なの？」と問われ、「ウーン」と困っているようなのです。

埼玉大学教育学部に36年間も勤めて、日本教育史をベースに、教育学概説・演習など幾つもの講義・演習を担当してきたつもりなのに。何々、まともな講義をしてこなかったのかと落ち込んでしまいます。心優しい彼等は「イヤ、こちらが真面目に聴けなかったということですから」と慰めてくれる。そう言えば、卒業近くになって、「先生、先生は教育学の先生だったのですね。僕は体育の先生かと思っていました」と真顔で語りかけてきた学生がいたなあ。

最終講義などという格調高いセレモニーは、柄でもなくただただ静かに退職していくのが分相応なことと考えていました。しかし、私がせ

めても教育史を専門として、埼玉大学教育学部教育学科（総合教育科学講座、以後総教）に所属し、よき先輩・同僚・学生諸君、そして多くの仕事仲間にも恵まれて、曲りなりにも教師生活・研究生活を続けてこられたことを感謝を込めて辿ってみるのも一興かなと考えるようになりました。

院生からそのまま大学教師となり、大学教師の何たるかを理解できずにオロオロする私を、大学教師とはこうあるべきですと、自由で伸びやかな世界に導いてくれたGHクラスの諸君。遊びのない私を誘い出してくれた八ヶ岳登山の苦しかったこと。コンパで焼き鳥の本数をめぐって生々しく争っていた光景も懐かしい。未だ自分の学問的世界に自信が持てずイライラする私を、遥かに大人の目線で我儘に付きあってくれた諸君。秩父夜祭り、花火の音の中、訳もなく走り抜けたなあ。約束を違えて、「イイカゲン手帳の森川」と揶揄しながらも、自動車を連ねてあちらこちらと連れ出してくれた諸君。イイカゲン教の信徒の振りをして、今なお私の支えになってくれていること、感謝するのみ。今、教育界を中心に幹部として中堅として活躍する姿を、彼等の学生時代に重ねるとき、不思議な思いにとらわれます。私同様に、相当にイイカゲンだったのですから。卒業後の伸びしろの大きさにこそ、大学教育の本質があることを確信させてくれる彼等を誇らしく思っています。老齢なのだからと話の輪からはずしながらも、いつも声を掛け続けてくれる若き卒業生達、などなど多くの魅力的な学生に囲まれて過すことができました。

教育学科（総教）の学生とともに、時にはそれ以上に私の埼玉大学での生活に、そして人間としての在り様に大きくかかわってくれた水泳部の諸君。水泳部との30年にも及ぶ付き合いは、私の研究生活に深みと励みを与えてくれました。そうした卒業生諸君への報告として一文を草してみたいと思うようになりました。定年退職者には、記念号として紀要に特別のスペースが与えられます。教育学科（総教）では退職者の「人と業績」というコーナーを設け、同僚の筆を煩わすことを例としてきました。しかし、語っていただく程の「人と業績」もなく、これまた恥ずかしい限りとの思いから自由になれそうもありません。そこで、私が私の「人と業績」を語らせてもらうことにしたいと思います。

50代にかかる頃から、『卒業論文要旨集』や水泳部の部誌『河童』等に小文を求められる時、自分自身を語っていることが多くなりました。自分を語ることと研究を峻別してきた私も、その頃から自然に自分と研究との重なりを語り出していました。モンテーニュは『エッセー』の第3巻を53-54歳（1586-7年）の時に執筆しています。読書余禄的な1巻・2巻と異なり、3巻は自らを語り、思索の頂点に達しています。「歴史家は自分の判断するとおりでなく、受け取ったとおりに、歴史を述べてほしいものである。私は私の扱う材料の王である。それについて誰にも義理はないが、それについて書くものをまったく信用しない。ときとして自分の機知をふり廻してみることもあるが、われながら心もとない」（原二郎訳『エッセー（5）』岩波文庫）と、徹底した自己描写による思索を試みています。「それについて誰にも義理はないが」の処は、堀田善衛さんの「それは（〈私の扱う材料〉）誰から借りたものでもない」（『ミッシェル城館の人・3』）の方が、私にはわかりやすい。自分を語る方法しかなく、しかしその語りは心もとなく自分は信じない。ただ、読む人の判断にゆだねるのみと言っています。

私も自分を語りはじめました。しかし、もち

ろん私は、私の語りを信用していません。ましてや、モンテーニュのごとく自己描写による思索の深化という方法的自覚をとまなうものでもありません。時々求められ、思いつくままに、その時の気分に応じて書いた小文を連ねて、私の教育史の歩みを辿ってみたいと思うだけです。自分の思考の跡づけのために小文と業績リストを対応させてみることにします。今更、私が教育史を専攻した「研究者」であると述べた処で、何の意味もありません。ただ、ただ、何か残りの人生に価値を見い出せるかもしれない事を期待して、心もとなくも私は私を語ることにします。

（一）故里とわたし

①いつもが祭り

僕の故里は播州平野の西の端、揖保川が瀬戸内海に合流する河口に発達したムラであった。水路が何よりも重要な流通の手段であった古い古い時代から我が故里は交通の要所につらなるムラであった。かつての幹線道路であった、今は自動車が行き交うのに苦勞する町を通る道の十字には、右室津、左竜野・姫路と刻まれた石の標識が残っている。室津は瀬戸内きっての良港として中世来、繁栄した港町。往時の繁栄を示すのかのごとく立派な遊女家敷が復元されている。室津に上り、そこから京・大阪にのぼるのがかつての流通の主要ルートであった。四国、九州、さらには朝鮮半島、中国大陆にも繋がっていたのでしょう。海・川の幸、山野の幸にも恵まれた豊かな地であったと思う。18才で故里を離れるまで、そして大阪万博の頃までは我が故里の駅前から我が家への道筋の商店街は、近郷近在唯一の繁華街であった。盆・暮には買い物客で賑わう街であった。そういえば当時、映画館が三軒、競いあっていた。

あの繁華な商店街も今はもう見る影すらない。子どもの頃あれほど大きく眩しかった各種の商店は多くが戸を閉め、あるいは駐車場に変じて

いる。歩く人には高齢者が目につく。静かだが活気のない淋しい街に変じている。たった一本の太い道路が古い街並を離れた山側につくられた、ただそれだけであの僕が誇りに思った街並はさびれていった。ムラの興亡とはこんなものなのだろう。自然が形づくった交通路にかわる一本のコンクリートの道が人々の生活意識・様式をあっというまに変えていく。振り返って、今、そうした時間の速さと深さを思う。

秋、10月の中旬、稲の取り入れが終わった頃。中学生の僕が離れの2階で机に向って中間テストの準備に入っている頃。遠くのムラからドーンデンドーン、ドーンデンドーンと太鼓を打つ音が響いてくる。風の向きによって、ヨイヤショ、ヨイヤショと屋台を担ぐ掛け声も聞こえてくる。窓からは柿の実の色が日々に深くなっていく。僕の村でも青年団が壇尻を出す準備のため各戸に協力を求めて歩く。役にあたった大人はブツブツ言いながらも仕事を終えて、夜、会所に出かけていく。三韓征伐の途次に神功皇后が休息した故事にもとづく、神功皇后を祭神とする魚吹八幡神社の秋祭りが近づいてくる。氏子にあたるムラムラの子どもや若者はもちろん、大人達も生き生きと動き出す。母親は子供や若者の祭り衣装や客を迎える準備に余念がない。父親は宵祭りの提灯行列のために提灯を引き出し、それをつける竹ざおをみがきだす。家々の門に祭礼の提灯を下げるためあちこちで玄関の汚れを流している。

いうまでもなく祭りの当日、学校は休みとなる。夕方、日が落ちる頃、触れ太鼓が回ってくる。子どものはやる気持を押さえている。ムラごとにきめられた順序で提灯行列は出発していく。先頭にはムラの名を記した遠目にも見える高張り提灯がつく。ついで、子どもが若者がとつづく。子どもは小さな提灯を若者は最初から太い長い青竹だけだったりする。顔が赤く、酒の臭いをプンプンさせている。子どもはそれをこわげに、しかしなにかしら憧れの気持ちをもつてその回りをうろろうする。各ムラムラの

提灯行列が神社に向かっていく。神社とはそこまで計算して位置が選ばれたのであろう。街並を出ると、刈り取られた暗夜の田の中に、四方八方から光の行列が一点に向かって進んでいく。美しく幻想的な光景であった（今は家並にさえぎられて遠くから神社を眺めることはできない）。しかし神社の大門に来ると事態は一変する。静から動へ、主役は煌々としたライトの中へ飛びこんでいく若々しい若者となる。提灯のない長い青竹でガチャガチャと押し合い練り回る。決められたムラの神社入りの順番を破ろうとする若者、守らせようとする大人達のせり合いが続く。子どもには恐ろしくドキドキする光景が繰り広げられる。家に帰ると熱い甘酒が用意されている。親達は今年の甘酒はできがいいとか、もう一つだとか話している。子どもは当夜の出来事を話しながら冷えた身体を温めるのが常であった。

翌日の昼宮は一転、実に華麗な絵巻が展開する。ムラムラの屋台―漆塗と金具で装飾された4人の稚子が太鼓の打ち手として乗り込む2tもある―がドーンデンドーン、ヨイヤショと100人近い若者に担がれてゆっくりと練り出していく。化粧まわしをつけた若者が肩をそろえ、力を込めて担ぎ上げ、ゆっくりと動いていく様子は、実に美しく、若者の力強さを見せつける。この日の夜遅く、ドーンデンドーン、ヨイヤショーの響が静寂と暗夜を引き裂くように聞こえてくる。屋台のムラ帰り、祭りの終りが近づいてくる。その太鼓の音も、若者の掛け声も終りの寂しさを心の限りに叫んでいるように聞こえてくる。あの始まりのワクワクさせてくれた同じ響きが、今は淋しく悲しく響く。明日からの日常への復帰を惜しむかのように。

僕が過ごした故里の秋祭り。日常と非日常が見事に織りなす時間、暦の中に生きていたと実感できる日々であった。

「いつも祭りのようやね」、亡くなった母が後年暮らしを共にするようになってからの、それが口癖であった。衣・食・住にハレとケのケジ

メを重んじた母の時代と、便利さと合理性を求めた豊かな時代に生きる僕とのズレを示す言葉だったのでしょうか。「いつもが祭り」のような日常になるにつれ、故里の繁華街は取り残されていったのでしょうか。秋になると母の口癖が憶い出され、母が感じた豊かさの中の悲しみを想うのです。

（『河童』1997年11月）

②ポプラの並木

この春、4月、思いがけずも病院暮らしをする破目になってしまった。4月4日の深夜に始まる大量の鼻出血は、断続的に止まることなく、遂に4月11日入院となった次第。担当医の適切な診断と処置で事なきを得て、22日に無事退院。入院生活も前半は鼻の奥への止血ガーゼの挿入で苦しむものの、後半はガーゼの量が少なくなり極めて健康な(?)時間を送ることとなる。しかし、出血に伴う貧血性のために一時の外出も許されず、寝ては一畳起きては半畳の空間の中で、三度三度の食事を給されての生活を経験する。9時消灯、6時起床のサイクルも慣れれば苦にならないが、深い眠りと爽やかな目覚めを味わうことはない。浅い眠りの繰り返しの中に朝を迎える。

痛みがやわらぐにつれ、懐かしい記憶が浅い眠りの間に浮かびまた、消えて行く。40年前、小学6年、12才の少年は盲腸の手術のため二週間を田舎の病院のベッドで暮らしていた。いやに天井の高い一人部屋で、これまたいやに頑丈なベッドに厚い布団をかけている。側に母と父が心配げに立っていた。クラスの友達が見舞いの言葉を見出せずに顔を赤らめて無器用にモジモジとしている。窓から見える巨大なポプラ並木が日々色づいていく。その移ろいを寂しげに眺める少年の目。その寂しさは病院での孤独のためでもなく、術後回復への不安でもなかった。その秋、小学生にとって最大の行事であった1泊2日の奈良、伊勢への修学旅行が迫っていた。5年の冬になると陽だまりの中での子供たちの

楽しみ話は、もう修学旅行であった。遊び仲間の6年生はいやに大人びた雰囲気で、いかに楽しくまた危険に満ちた旅であるかをおもしろおかしく話している。トンネルで窓を閉め忘れたため蒸気機関車の煙で顔が真っ黒になったとか、宿では枕投げで大騒ぎになり先生に叱られたとか、奈良公園の鹿に追い回されたとか、などなど。

その修学旅行がせまっていた。それに参加できるのか、何としても参加しなければ。絶対にいくのだと涙を流していたと後に母から聞かされた。我儘で勝気な少年は、自分の思い通りに事が進まないことに異常に腹を立て、周囲に当たり散らす実にイヤな子どもであった。周囲の人々とうまく折り合いをつけられない不器用さにうんざりしながらも、なおその事に苛立ち衝動をコントロールできない少年。遅く出生した最初の男の子のため我儘いっぱい育てたことを悔いながら、母はそんな事では社会に出てから困るのだからと幾度となく諭していた。(そんな母の嘆きがいつの間にか身に浸みついていたのだろうか。少年はその後我儘に生き続け、我儘が許される職業として研究者の道を選ぶことになる。今、少年は40年を過ごして研究者の必要条件は我儘にあるのだと確信しているようだ。後年、約束に反して田舎に帰ることなく他郷に職を求めることを、母は淋しくも我儘な少年の必然の進路として許すことができたのでしょうか。)

深い眠りの中で、病室の窓から眺めるポプラの並木と笑い顔の若かった母の姿が重なりつつ浮かんできてくる。少年の淋しさは、実は、修学旅行のことよりも、そのポプラ並木が誘う光景に関係していた。網干（あみをほす、地名としてはあはしと読む）の字の通り、瀬戸内べりの半農半漁の町として古くから栄えていた少年の住む黒い重々しい屋並に、ポプラ並木が誘う軽快な明るい光景は、異質な不思議な魅力をかもし出していた。そのポプラ並木は、三井財閥が明治の末にヨーロッパから技術導入してセルロ

イド製造のために起ち上げた工場に続いていた。半農半漁の古い町に暮らす少年の眼に、そのポプラ並木の先にある芝生の庭を持つ洋風の社宅の並びとそこに暮らす人々の世界は、異界であり憧れの空間であった。クラスにも時々、その社宅の子が通学してくる。誕生会が開かれ、ピアノが演奏され、紅茶とケーキが出される世界。リボンを付けた少女がピアノを奏でる姿は、田舎の少年の眼にはまぶしく、正視することすらはばかれるがごとくであった。ポプラ並木をながめる少年の眼は、もしかして病室に現れるかもしれないある光景を空想していた。しかしそれがポプラの先に見る幻想にすぎなかったことはいうまでもない。

この修学旅行に無事参加できた少年は、旅行の終わりとともに急速に子どもの時代が終わりに近づいたことを感じていた。もう子供ではない、中学生なのだ、大人への入口にさしかかっているのだ。中学卒業で半数が就職した時代のことであった。少年の町ではこの修学旅行を親達は“お伊勢さんまいり”と呼んでいた。昔から青年は大人への旅立ちとして、グループを組み、“お伊勢まいり”に出かけるのであった。宿泊を重ねて、さまざまな大人への通過儀礼をこなす楽しい旅であったのだろう。親達はその折のさまざまな自慢話や失敗談を、人の集まりごとに語り合っていた。少年にとって絶対に参加しなければ、何か大事なものが逃げてしまう、取り返しのつかない大事に思えていたのであった。

少年の日、潮風と土と労働に焼ける重い日常と習俗の世界と、ポプラ並木の先に見る文化的な軽やかな明るい世界と、二つの眼はこの二つの世界に重なっていた。いずれもが手離しがたく、日常の世界とあこがれは穏やかに共存していた。そんな平和な時はすぎ、やがて少年は労働と習俗の重い世界を嫌い、都会に出ていくことになる。今、40年を経て病院のベッドから眺めるビルの街並と訪う妻との会話の中に、初々しくもせつなかった少年の日を憶い、過ぎた時

間と田舎を去った今の暮らしを思うのであった。少年は何を掴み、何を喪ったのだろうか。

(『河童』1997年5月)

③寺の墓

この春、4月、父と姉の三十三回忌の法事をするために、久しぶりに故郷網干を訪ねることになりました。姉は僕が学部での4年の夏休み、頂度帰省して裏の離れで卒論のための資料整理をしていた深夜、突然の病院からの連絡に駆けつけたとき、すでに言葉をかわすことができない状態でした。僕の帰省前に体調を崩して入院していたのですが、実にあっけなく亡くなってしまいました。父はその翌年、僕が大学院の修士1年の6月に胃ガンで、半年の闘病生活を経て亡くなりました。父を見舞うため、何度か帰省し母を助けて農作業をしたことを思い出します。初めて手押しの耕運機を使い、畑の畝立てをしていたのもその折のことでした。我儘に育ち、いまだ畑仕事らしいこともしなかった息子に不安だったのでしょうか。あるいは、元氣になればその後の作業をしなればと考えていたからでしょうか。父は畑の草地に腰を下ろして僕の作業を見ていました。小柄な口数の少ない、真面目一筋の父は、何事にも前向きで積極的な母の前では存在感の薄い人でした。父が自ら自分の生きた歴史について、あるいは長男である僕の生き方について語ることはありませんでした。父が祖父との関係で苦勞したこと。自分の人生への夢を静かに押し殺して、祖父の指示する道を選んだこと。そして、決して祖父に逆らうことがなかったことなど、父の歩みを教えてくれたのは、母の語りによってでした。父から自らの人生にかかわって愚痴めいた話を聞くことは一切ありませんでした。

もう数えるだけの父と子の残された時間を前にしても、父は何も語り残すことなく逝ってしまいました（父自身は回復を信じていたのかもしれませんが）。ただ、それだけにふと洩らすように、独白のごとく語ってくれた言葉は印象

深く残っています。田舎の畑作農家の長男に生まれた父は、小学校卒業と同時に手間稼ぎの仕事に出され、以後、学校という世界に関することはありませんでした。勉強の好きな、気弱な父は、学校で学び、そしてその先に彼らしいひそやかな夢を持っていたと思うのです。しかし、祖父の命に逆らうことなく学校を離れ、兼業農家のあるじとして真面目一筋に働き通した生涯を送るのです。父の弟は苦学しながらも関西大学の法学部に進み、弁護士をめざすことになるのですから、父がどんな気持ちで大学を眺めていたのだろうかと、思えば胸が締めつけられ、切なさが込み上げてきます。しかし、その叔父もアジア太平洋戦争に動員され、「満州」（中国東北部）の病院で亡くなるのですが。

小学校の中学年の頃だったと思います。冬の夕方、畑仕事を手伝っていました。その日は大根の収穫作業でした。冬の夕方にしては穏やかな日でした。父が作業の手を休め、西の山に入りかけた夕日を見ながら、“土に親しみ陽にこがせ”と独白のごとくつぶやきました。“えっ”という僕の問い掛けに、勤務先の工場での標語コンクールに応募して入選したものだと小さな声で話してくれるのです。数少ない父と子が何かしら感じあうことのできた、それは僕にとって忘れ難い風景でした。それから、この話は何時の頃だったかははっきりとしませんが、今度、常務取締役として網干工場長に就かれるAさんは、大阪大学の学生で、学生帽と学生服で工場視察に来られたとき、お会いした人なのだと。同世代の若者が一方は学生服姿のエリート候補生として、他方は工具として汗にまみれる、この対比に父は何を思ったのでしょうか。学生帽と学生服に象徴される同世代のエリートを羨望よりは諦観のまなざしで遠くに見ていたのだと思うのです。そして何十年を経て今は見事に大幹部に大成したAさんに、かわらず工具として汗にまみれる自分の姿を重ね、長男である僕への期待を間接的に伝えようとしていたのかもしれないと思うのです。

大学は父にとっては叶わぬ夢でした。それだけに僕が大学に進むことを喜んでいました。僕が進学する1963年には大学進学率も20%にせまり、もはや大学は大衆化しエリート養成の場ではなかったのです。それでもさすが学生帽姿はほとんどなかったと思いますが、大半が黒のハイカラーの学生服姿でした。姫路から東京までは夜行列車銀河で12時間を要していました。僕が大学に進み、長い休暇に帰省する度に、父は何かを語りかけたかったのだと思います。でも残念ながらその時、父と僕の間には共通の言葉を見いだすことはできなかったのです。僕が読んでいる本や学生生活について父は聞き出す術をしなかったのです。僕が大学院に進むと言ったときも、それがどんな意味を持つのか父には理解できなかったと思います。父を最後に見舞ったのは亡くなる6月のことでした。父は病床で自らの働き者らしいゴツゴツした手指を眺めながら、“もうだめだと思う”と涙を流しました。沢山の語り尽くせない苦難を語ることなく生きた父が、僕に見せてくれた最初にして最後の涙でした。

法事をすませ、揖保川沿いの道を早朝、妻と駅に向かいつつ、ふと振り返ったとき、僕の家菩提寺の墓が村の屋並に頭一つ抜け出して見えるではありませんか。それだけは僕にとって変らぬ風景でした。父が元気であった時、闘病生活の時、幾度となく帰省した折、駅から揖保川沿いを家に向かう僕の眼にまず入ってくるのは寺の墓でした。父が語ることなく涙に見せた息子への思いを僕はどれだけ受けとめられたのだろうか。

（『河童』1999年5月）

（二）水泳部とわたし

①和而不同

春の早い今年のゴールデンウィークの我が山荘は、唐松の芽吹きに包まれ、鳥達の鳴き声に目覚め、朝の冷気に触れる時、身も心も生き返

る思いがする。山歩きの途次、山菜を採り、テンプラで食する時、自然の恵みの妙をただひたすらに実感する。濃密な味わいと香りは、しばらくの沈黙を求め、妻との会話に空白が生まれる。その余白もまた捨てがたい。存分に楽しむことができた連休であった。さてさて、下山して、夏休みまでの長さが気を重くする。しかし、労働と遊びのバランス、緊張と弛緩、このバランスこそが人生の妙なかもしれない。

その一日、小海線から身延線を乗り継いで水泳部OB・OGの結婚式に出かけてきた。静岡でのパーティーには同期の諸君も勢揃いして、二人の笑顔を眺めながら存分に会話を楽しんで来た。耳順近くになれば、あれこれの関係のパーティーの機会を与えられるが、水泳部諸氏との会合ほど、心やすらぎ楽しい余韻が残ることはない。富士の裾野をゆったりと走る列車の揺れの中で、程よい酔い加減の頭は、なぜそうなのかと思いをめぐらせてくれていた。

僕と水泳部の出会いは、前部長の柴田さん（現 福岡大）がポーランドに留学された間、代理を務めたことに始まる。80年度卒の臼井君が主将の時だった。誘われて8月末の納会に顔を出した時の衝撃は今も鮮明に残っている。今は取り壊されてしまったが、大集会室というバラック小屋に、毛布や布団、いうまでもなく汗と汚物の染み込んだやつですが、それを布きつめ、車座になって次期幹部選出の相談が始まりました。部員全員の投票で主将以下の幹部が選出されていきます。体育会系の部ですから、何等かの基準を設け、あるいは上級生の推薦によるのかと予想していたのですが、実に民主的な方法をとっているのにまず驚きました。しかも、投票用紙にはコメントが付されており、それが読み上げられていきます。笑わせながらもなぜ、この人に投票したのかが窺えるなかなかセンスのいいのもありました。批判的な“悪口”を書いてもそれを笑い飛ばすおおらかさに満ちた雰囲気、ただただ驚きつつ眺めていたことを思いだします。

それまで狭い道を、さしたる挫折も知らずに“優等生”的に生きてきた僕には驚天動地の世界がそこで繰り広げられていたのです。その折に、僕は『論語』のあるフレーズを連想していました。「子曰、君子和而不同、小人同而不和」、吉川幸次郎の名訳を借りると「君子はそれぞれに主体性をもちつつ、人々と調和するが、附和雷同はしない。小人はその逆である。」ということになります。君子は教養のある人間と置き換えることができますから、水泳部のあの野性的な猥雑さの中に潜む知性の深さと広さに眼を開かれました。取り澄ましたスマートさ、薄っぺらな知性という近代の価値がいかにあやういものかを知らされた気がしました。これは大袈裟なことではなく、僕にとっては実に新鮮な刺激になりました。ですからそれ以来、水泳部の魅力にとりつかれ20年以上が過ぎたことになります。

和して同せず、一人一人が主体性をもって調和する理想の社会を孔子が描き、古代ギリシャのポリスの政治も表現は異なれど闘技（討議）と調和を原理に営まれていく。水に醤油や酢や塩や砂糖を加え、火にかけることによって味は深まっていく。もちろんバランスよく加わってのことであるが、それが「和」であり、水に水を加え、砂糖に砂糖を加えても量は増すが味が深まることはない、これを「同」というのだと吉川幸次郎は説明しています。一人一人が討議の主体となり、その差異と重なりを認めあうことによって豊かさが生み出されていくことになるのだと思います。日本の教育文化は、7世紀の聖徳太子の17条の憲法の第1条に象徴されるように「和をもって貴しとする」と、まず「和」が無条件の前提とされ、「不同」が忘れられてしまうことが多い。和とは決して他者に同調することではない。そこからは新たな可能性を生み出すことはできない。しかし、日本の教育文化は残念ながら「同而不和」が支配的であるようです。

日本の近代の知性が求めてきたのは「和而不

同」の世界であった筈です。そして、大学は本来はその拠点である筈でした。しかし、にもかかわらず……といった思いが僕自身の心の葛藤でもあったが故に、水泳部の納会での幹部選出の民主的なおおらかさに感動することになったのだと思います。毎日、毎日、プールの中での孤独な練習の中で、おそらく“一体俺は何なのだ”と自己との対話を繰り返しながら、泳ぎ続けていることの結果として、一人一人の主体性が明確に打ち出され、討議と調和のバランスが自然に身についてくるのではないかとと思っています。和して同せず、一人一人の輝きと他者との差異を認め受け入れる寛容さが生みだすあの穏やかさが僕をして楽しくさせてくれるのだと思う。

列車は下部温泉を通りすぎていく。そういえば、水泳部と出会った頃、亡母の膝の療養のため下部温泉に出かけて以来の身延線の旅になる。その母の十三回忌をこの四月に迎えていた。あの大集会室でのあの時の光景と元気な母と二人の幼かった息子達の姿を憶いながら20年という時間の流れとともに、不易な和而不同の世界を思いつつ、気持ちよく列車は走っていく。

『河童』2002年5月)

②遙かな山荘

1980年3月、八ヶ岳の佐久側にある友人の山荘に招かれました。学生との卒業旅行で秩父に出掛けた帰路、国道254号をくねくねと走って夜の入山になりました。ズボ、ズボと膝まで雪に足をとられながら、山荘入りし、ストーブのぬくもりもありがたく、ウイスキーを飲みながら静かな時間を過ごしました。早朝の冠雪に輝く八ヶ岳の稜線と眼前の真白な高原の光景は実に印象深いものでした。

その年の5月ごろ、朝日新聞の下段広告欄に記憶に残る山脈の写真が掲載されていました。八ヶ岳高原の分譲地の広告写真でした。ついつい、お値段表に目を移しました。高額で、手が出ないほどでもないかと確かに思いました。し

かし、75年に小さいながらも建て売り住宅を購入しローンを抱える身には、まるで関係のない世界でした。僕は播州の小さな兼業農家の長男であったにもかかわらず、親の思いを裏切って埼玉に就職していただけに、いつでも母親（父は修士1年の夏に胃癌で亡くなっていました）を迎えられるように、小さいながらも就職とともに建て売り住宅を求めているのです。時は、石油ショックの余波があったものの、日本経済がバブルの道を走り始めたころでした。当初の僕の計画では、この小住宅でしばらく我慢して、そのうち、駅に近い広めの家に移ることになっていました。しかし、庶民の悲しさ、土地価格の上昇、とりわけ駅に近い条件のよい所の上昇率は、給料やこの小住宅のそれを大幅に上廻っていきました。頂度、転売による頭金での駅近くへのステップアップが現実性を失いつつある時でした。その広告を目にしたのは。しかし、暫くは当初計画にこだわっていました。いよいよ、ステップアップ計画をあきらめざるを得なくなった時、八ヶ岳高原の分譲地を思い浮かべていました。

土地価格の上昇を考えると、購入するなら早い方がいいだろうと、とにかく土地の購入を考えることになりました。母に相談すると、「ええ事やね」と賛成してくれました。田舎の土地を守ること、少しは上げられた事に人生の価値をおく母が、積極的な姿勢を示してくれたのは意外なことでした。勤勉節約を信条にする母が、セカンドハウスなど分不相応な贅沢だと反対するのではないかと考えていたものですから。苦労していただけに、「別荘」という響に何か満足なものを感じたのかもしれませんが。最小の区画を何とか手に入れたのは82年のことでした。

播州の瀬戸内べりの半農半漁の町に育った僕にとって、川と海は身近なものでした。春の潮干狩り、夏の海水浴、揖保川の清流での水遊びも懐かしいものでした。しかし、山の楽しみを味わうことはありませんでした。4km程北に走ると朝日山があり、その山上から国鉄（JR）

の網干駅を眺め、長い長い貨物列車の台数を数えて遊んだりはしていました。しかし、里山での遊びにそれほどの喜びを感じたことはありません。信州の山の風景に特別な思いを持つようになったのは、いつのころだったのだろうか。多分、藤村の作品を読むようになってからのことかと思います。信州の残雪に輝く高い山脈、千曲川の清流と長く蛇行する川筋、小諸の古城跡、それ等に「遊子悲しむ」という青春に特有の切ない心情が重なっていたのだと思います。そうそう、藤村が「初恋」に重ねるリングの白い花の五月と秋の赤い実の風景も、海辺に育った僕には幻想的でした。学生時代、サークルの合宿で幾度か信州に出掛けました。信越線で碓井峠をこえて小諸に出、浅間山麓の民宿で何日かを過ごすことができました。千曲川も小諸の城址もリング畑も懐かしい記憶をより深く鮮明なものにしてくれました。山荘を考えた時、信州以外には考えられなかったのです。浅間山麓、軽井沢はあまりに著名であり、僕等庶民には気後れする処もありました。八ヶ岳の最初の印象の強烈さと荒々しさを残す自然、そして何よりも価格が魅力でした。

からまつ林を過ぎて、

からまつをしみじみ見き。

からまつはさびしかりけり。

たびゆくはさびしかりけり。

そんな詩人の感覚を思い出させてくれる美しい唐松の長いアプローチも魅力的でした。

しかし山荘を建てるのは資金不足でもあり、そのうちに考えていました。ところが、母がある時、「早く建てへんと、年齢なんだから使えないやんか」と催促するではありませんか。母の援助も得て山荘建設に着手することになりました。そのプロセスも楽しいものでした。何回か、今から思うと恐いことでしたが、サニーの中古車に家族5人が乗り込んで、現地に出掛けました。今はトンネルが貫通して下仁田からの内山峠越えも快適なものです。当時は細い川沿いの道で、大型の対向車にヒヤヒヤしながら

運転していました。担当は大学を出たばかりの横井さんでした。多分、彼女の初めて担当した仕事だったと思います。住居学科の出身というセンスと女性らしい感性を生かして、僕等の山荘らしからぬ生活臭に満ちた、しかも資金を切りつめるリクエストをうまくデザインしてくれました。部屋数は最少でいいこと、天井は高くして自然材を使いたいこと、佐久平の眺望を楽しめること、収納は多くとることなどなど。20年暮してもあきのこないデザインで、その使いよさと合わせて僕等には満足度の高い山荘ができあがりました。83年8月に地割して、84年7月から使用可能になりました。当初のデザインでの反省は、周囲の樹木の成長を計算に入れていなかったことです。二階の北側からの佐久平の眺望は、唐松にさえぎられて、今は望むことはできません。ベランダに残した白樺のあの白く輝いていた幹も、今は老いて黒ずんできました。それ以外は、20年の時間の重なりとともに十分な満足を与えてくれています。

山荘の最初の来客は、水泳部の諸君でした。84年8月11日、大家君が能登半島旅行の帰途、輪島の朝市の大きな柿渋の団扇を持って訪ねてくれました。翌日、「古屋号」で宮嶋宅訪問の一行が八ヶ岳に廻って来てくれました。あの時の写真を見ると、僕も家内もまだまだ若く、息子達はもちろん子どもでした。ベランダの集合写真に見る諸君も紅顔の若者でした。鎌形君の元気な姿もあります。ロスアンジェルスオリンピックの年で、マラソンの瀬古選手の敗戦の姿——彼が帽子を放り投げて、ズンズン後れていく姿は寂しいものでした——を見たのを思い出します。それから毎夏、誰かが訪ねてくれました。諸君と過ごす夏の日々は、僕にとっては遅れて来た「青春」の日々であり、喜びでした。皆が帰山した後の淋しさ、仕事という日常に戻らねばならなかった気の重さを思い出します。未だ仕事の面で自信を持つことのできなかった「青春」の時だっただけに、日常を離れた沢山の夢多い会話は、僕にとって貴重なものでした。

夏毎に、そうした日々を重ねてきました。テニスを楽しみ、ゴルフを覚え、山登りの喜びを感じることができるようになりました。山菜、木の子という自然の恵みを美味しく頂き、自然に感謝することも実感できるようになりました。知ることのなかった世界、感じることのなかった深さを教えてくれたのは八ヶ岳であり、訪う人々とのぬくもりある会話でした。

山荘を望んだ母は、春、夏、秋と僕の山行きによく同行してくれました。富士見岩のハイキングコースに、無理だからと止めたにもかかわらず息子と一緒に登るほど元気でした。山荘での静けさと、高山の草花を楽しんでいたようです。難病で余命を限られた89年の夏、母は姫路に住む妹と大阪の娘と10日間程をこの山荘で過ごしました。何を話していたのでしょうか。よくしゃべっていました。母の山荘はその夏で終りましたが、母の思い出を沢山に残してくれたのもこの山荘のお陰だと思います。

たまたま誘われての一度の印象と新聞広告から、八ヶ岳山荘は具体化したわけですが、これも一つの「運」だったと思います。思い返すと僕のこれまでの人生は、まったく「運」には恵まれていました。「運」よく埼玉大学の教育学部教育学科に日本教育史担当で職を得ることができました。今でこそ、並みの学科になってしまいましたが、就職した74年当時、埼玉大の教育学科といえば、学会レベルでは実に全国区の学科でした。たしかに、それぞれの専門学会のリーダーが揃っていましたので、友人達は羨やんだものです。特に、教育史については、戦後の教育史研究をリードした教育史研究会（略称：教史研）の中心メンバーがおり、事務局もおかれていました。もちろん、教史研の活動は終っていたわけですが、70年代、教育史研究の第一線は、この教史研を揺籃の地とした人々に支えられていました（その他論文14参照）。アカデミックな学風を重んじる重厚な雰囲気を持つ学科でした。それだけに「運」よく採用になったものの、未だ学問的世界を自分なりに描

くこともできず、悶々としている30代の僕には、大きなプレッシャーを感じる日々になりました。思い返すに、もし地方のノンビリとした大学に就職していたら、性来の怠惰さに敗けてダラダラと日々を過ごしてしまい、淋しい思いでこの年齢を迎えていたにちがいないと思うのです。30代の苦しい先の見えない時間にたえて、少し何かが見え出した40代にかかるころ、しかし、不惑にはほど遠い惑いの中にあったころ、この山荘を持つことになったのです。家族と過ごす時間、訪う人々との時間も、山荘ならではのゆとりのある気分で楽しむことができました。この山荘が未だ不安と惑いの中にいる僕の気持をおちつかせてくれました。実にいいタイミングだったと思います。

家族や人々が下山してからの一人だけの時間は、読書以外になすすべもなく、思いの外に仕事に集中できました。最初の著作（学術単著1）をまとめることができたのも、その後の仕事も（学術単著2、3、4）、この山暮らしという時間にうながされてのことになりました。そうして、40代中葉、自分なりの学問的世界を描ける見通しがついたように思うのです。山荘に出掛ける時、これだけはとかなりの本と資料を積み込んで意気込み十分に自動車に乗りこんだものでした。

二人の息子が妻と初めて入荘したのは、84年8月7日でした。信越線で小諸に出て、小海線に乗りついで野辺山におりたちました。リュックを背負い捕虫網を持った少年のキラキラした姿を思い出します。彼等も今は独立して家庭を営んでいます。名古屋の長男夫婦は孫をつれて夏には来てくれるとのこと。2月に結婚した次男夫婦はテニスをしに行くからと言って来ています。妻は横浜の生まれ育ちですが、港街ヨコハマではなく岡津の里山育ちでしたので、埼玉に住むようになってから山の見えない風景には違和感を持ちつづけていたようです。彼女にとっての八ヶ岳は、岡津時代、学校の行き返りに歩いた里山の景色と父と様々な採集に歩いた

時代を彷彿とさせてくれる場所でもあるようです。遊牧民のようなすぐれた視力で沢山の鳥や草花の名前を覚えてもらっています。山荘では日曜画家ならぬ夏休み画家として、八ヶ岳を描いています。今は、高原の雲がテーマだそうです。念願は、いつか八ヶ岳高原ロッジのロビーで個展をやることだそうです(?)。

50代の後半にかかるころから、山行きには本や資料を積み込むかわりに、登山道具、山菜・木の子関係の道具類、ゴルフバックを積み込むようになっていました。山菜や木の子を求めて、別荘地内をよく歩くようになりました。リコボウに始まった木の子採りも、タマゴダケ、ヤマドリダケ、ヤマイグチ、ヤナギダケ、カラカサダケ、チチダケと守備範囲が広がりました。タラノ芽からスタートした山菜採りも、ワサビ、ウド、コシアブラ、ハリギリ、ワラビとこれも進化をつづけています。果実酒に好適のヤマナシの大木を何本も見つけることができました。山荘に近い杣添コースからの赤岳をめざして、僕の登山は始まりました。今は、宮嶋君の好指導をえて、念願の北アルプス（穂高岳、槍ヶ岳）を楽しめるほどになりました。山荘生活もどうやら還暦の声とともに名実ともに第二ステージに入ったようです。そこにまた何か思いがけない「運」が開けるかもしれないしと期待しているのですが……。

二人目の育ての親にも似る八ヶ岳の山容は、今日も天空に端正にして重々しいたたずまいを残しています。

(『別冊 河童』2004年夏)

(三) 研究の歩みとわたし

①不易な風景

僕が卒論を提出して卒業したのは、1967年のことでした。40年近くも前のことになります。十年一昔といいますから、もう「大昔」のことになってしまいました。当然のことながら大学の風景も大きく変わりました。一言でいえば、

当時の大学はノンビリしたものでした。講義の最初と最後は、自然休講で2週目から始まり、1週間前には終了するのが普通でしたし、語学と体育実技以外では出席をとることもまれでした。ある先生などは講義の準備ができなかったからと休講にされていました。まじめに講義に出た記憶は、一つか二つくらいしか思い出せません。それでも卒業できたのですから。

ただ一つ、入学時から言われたことは、卒論は大変だし、大事だよということでした。量にして100枚(400字詰)程度の論文を作成することが、大学の勉学を含むすべての決算になるのだからと常々言われました。卒論の執筆に悩み、鉄道に飛び込んだ学生の話も聞かされていました。僕も卒論だけは常になく力を入れていました。「明治9年町屋一揆に見る教育的様相とその後の変化」。この何とも長ったらしいのが、僕の卒論のテーマです。1872年に公布され、日本の近代学校の出発点となる「学制」を、当時の人々がどのように受け止めていたのか、あるいは拒否したのか、つまりは、人々にとって近代の学校(教育)とはどのように理解されたのかをテーマにしたものでした。

茨城県真壁郡の町屋で、近代学校の設立に反対する騒動が起こっており、それを検証することによって、「学制」の持つ意味を考えることにしました。1966年の夏に、何度となく真壁の田崎さんのお宅を訪ね、土蔵に合った文書の調査をさせていただくことになりました。今でも、夏の陽ざしの中、真壁の駅に降り立った時の、不安な緊張した気分と駅前に積まれていた石材の風景を思い出します。一夏をかけた文書整理で手に入れたのは、若干の史料と一枚の図表だけでした。なんとかそれを素材に稚拙な卒論を提出し卒業できたわけです。事実と論理によって一つのストーリーを構成する作業が、いかに能力と集中力と教養を必要とするかを実感し、自らの非才・非力に落ち込む日々と重なっていたことを思い出します。

大学の変化は著しいものです。しかし、テ

マを見つけ、書物（史料）を読み、思索を深め、文字化する、その繰り返しの中で、自らの仮説を検証していく。そして、人間・社会・自然を読み解く力や方法を身につけていく。この大学での学び方は、「大昔」にも共通する不易のものだと思います。苦しみ、少しは感動しながら卒論に取り組み、一般的には多くの反省とともに卒論を提出したのではないかと思います。それこそが、不易な大学の、学生の卒業にかかわる不易な風景だと思います。

ただ一つ違うとすれば、教員との関係でしょうか。僕が指導の先生と卒論についてお会いしたのは三度にしかありません。“う～ん、おもしろそうだね”—これは中間発表の時。“史料はどれくらいあったの？ 一箱、二箱？”—これは秋に相談に伺った折のこと。そして卒論の口頭試問の時には、“う～ん”で終わりました。後にある先生から大学教師の苦行の一つは、ツマナイ卒論を何本も読まされることだとの話を伺ったことがあります。大きな研究に取り組んでおられる先生にとって、何とも頼りない卒論なのですから、それも十分に納得できることでした。しかし、一度も、一言も、“こんなのはダメだ”とはおっしゃいませんでした。何ほどの可能性をそこに感じようと務めておられたように思います。

卒論は他者の評価にゆだねるものではないと思います。それは、まさに「青春の墓標」なのです。何年か後になって、それぞれの卒論は、それぞれにとって意味深いものとして甦るものだと思うのです。僕が稚拙な卒論の意味に気づくのは、数年も経ってのことでした。40枚ほどの論文に仕上げ、ある雑誌に投稿しました。僕にとって一番思いのこもった作品となっています（学術論文4、学術共著6）。その後の時間の経過の中で、自分の思索の意味を深めることになる。これも不易な風景だと思います。

（『卒業論文要旨集』37集、2005年）

②筆記の時代

昨年は、卒論にまつわる昔語りを書きました。今年は、その続きということで修士論文にかかわる記憶をたどってみることにします。修士論文のテーマは、1879年制定の教育令の成立過程を検討し、後に「自由教育令」と批判者にネーミングされ「失策」であったとの評価を受けることになる田中不二麻呂の教育政策を再検討しようとするものでした。もし、この論文に価値があるとすれば『保古飛呂比』と題された佐々木高行の日記を丹念に読み、明治天皇の側近グループとの対抗関係の中で、田中等文部省首脳が近代教育を模索した点、そしてその対抗関係上、その企画が中途半端に終わった点を明らかにしたことにあったと思っています（学術論文2）。

ところで、この論文の中核をなす史料の『保古飛呂比』についての思い出は実に鮮明なもので、そして時代の変化を痛感しています。当時、日記は東大の史料編纂所に所蔵されており、一夏、この閲覧のために通うことになりました。恩師－唐澤富太郎という著名な教育史学者－の紹介状をもって、『保古飛呂比』の閲覧を受け付けに申し出ました。すると、その担当者は恩師の名刺を眺めながら、こういうのです。“こんな方は、知りませんね”と。実に不快な様子で拒否するかのような仕草をするわけです。驚きました。東大という権威を背景にしているのか、あるいは史料編纂所という格式の故になのでしょうか、若いこの馬の骨かわからない院生などが、そう簡単にここには出入りできないのだぞと言わんばかりの態度でした。

そんなイヤガラセを呑み込み、それから日参することになりました。薄暗い狭い閲覧室で、日記を読み、必要な所をノートに筆記する日々が暑い夏の間、続くことになります。それらを織りまぜて修論を作成提出することになります。今は、『保古飛呂比』は刊行されており、誰もがそれを手元において読むことができますし、必要な所をコピーにとることができます。研究

にかかわる文献的環境には隔世の感があります。今の条件下では私の修論など実にありふれたものでしかないわけです。

私の仕事部屋も本や資(史)料のコピーが積み上げられていますが、怠惰の故もあって十分に読み込むこともなくそのままの状態が続いています(ITを駆使する諸君などは、フロッピーになるのでしょうか)。いつでも読める、また読み返せると思うからでしょうか、本やコピーの扱いが乱暴になっているように思います。一回勝負で集中して読み、必要な所を筆記する作業を続けたあの時のことを懐かしく思い出すことがあります。今は情報の量は増大し、アクセスも容易にコピー技術も進歩しているだけに、逆に大変なことだなと思うことがあります。限られた史料を丹念に読み込んで見えてくる世界と大量の情報に接する中から見えてくる世界と、どちらが深く広いのだろうかと考えてみるがあります。もちろん、質も量もというのがベストなんでしょうが、あえて質か量かを問うとすれば、私は限られた選び抜いた一冊のテキストを読み込む方が、広く深い世界に行きつけるのではと考えています。

卒論の作成過程の中で、幾つかの本やデータや人に出会えたことと思います。そして、なおこだわってみたいと思う一冊の本、一つのデータ、一人の人に出会えたとしたら、それこそが大切な宝物だと思います。卒論を書く、それは文字と言語を介して何かに会うということだと思うのです。さて、どんな本、どんな人、どんなテーマに出会えたことでしょうか。

(『卒業論文要旨集』34、2006年)

③脚下を

“筆記の時代”は修士論文にかかわる昔話だったので、今回は博士論文ということになります。しかし、その才に恵まれず、またそれを補う努力もしなかった故に、博士論文をまとめることもできず今日に至っているわけです。恥ずかしいことです。そこで、閑話休題、話は脇道

へ。

博士課程に5年在籍し、研究会誌に2本(学術論文2、4)、大学院の論集に2本(学術論文1、3)発表し、最後の2年は講談社の『日本教育史Ⅲ』(世界教育史体系3)の「昭和前期」の通史編(学術共著1)の原稿を書いていました。そして、運よく埼玉大学の教育学科(今の総教のことです)にポストを得ることができました。29歳の時でした。僕には有難いことに生涯を通して、心から先生という敬称をとまなう先達が二人います。昨年末に400枚程の年賀状を書きましたが、宛名に先生の敬称を付すのは、ただ1枚だけです。1人の先生は2年前に亡くなられたものですから。今は唯一の先生、国語教育学の文句なしの大家、倉澤栄吉先生の御自宅に就職のごあいさつに伺いました。1974年3月の末の肌寒い日でした。先生は、僕たちの学部時代のクラス担任をして下さいました。悲しいとき、つらい時、迷うとき、先生の一言に救われ続けてきました。御自宅にうかがった時、先生はたぶん大島紬だと思うのですが和服姿でした。客間のストーブで、先生が愛されている広島に酔心を自ら爛に加減を見ながら、こんな話をポツリとして下さいました。

先生は決して正面を向いて教訓めいた話を上から下にはなさいませんでした。ぼつりというのは、横を向いた姿勢で語るともなく語る風に、明瞭な言葉で話されたことを僕なりに表現したものです。“森川、僕はこの世界(国語教育学)で自信を持って生きていけると思えたのは、40歳の時だったよ”と、先生は話して下さいました。若くして、注目される著書を発表されている先生が、どうして? とただただその時は不思議さを感じるだけでした。

“先生”と呼ばれる身になったものの、確たる学問的世界を描くことのできない我が身の虚しさは、時間とともにつり、不安と焦燥に駆られる日々を過ごすことになりました。同世代の同学者の活躍をみるにつけ、その焦燥感は一層つのっていきました。その折に倉澤先生の

“森川、40歳だよ自信が持てたのは”との言葉が重く深く理解ができるようになりました。出口の見えない30歳代をジーっと脚下を見つめて、自分なりの学問的世界を求め続ける努力をすれば、レベルはともかく僕なりに納得できる教育史像を描けるのではないか、そう思い込んで資料調査に励み小文を書き続けました（学術論文9～15）。学会で注目されることもなく寂しい日々が続いていました。

先生が話して下さった様に、40歳にかかるころ、何か自分なりに確かなものが見えてくるようになりました。1987年に最初の著作を刊行することができました。42歳のことでした。決して十分な成果ではなかったのですが、そこを出発点に、僕なりの自信をもって教育史を語ることができるようになったと思います。レベルは博士論文に達することはできなかったのですが、僕自身は納得しているのです。

卒論（学部の卒業）を出発点にして、30歳にして立ち、40歳にして不惑という孔子の知恵に学んで、長いスパンで自分自身の成長を思い描いて下さい。振り返ると、僕も結果的にそんな時間を過ごしてきたようです。年の暮れ、95歳になられた先生から“昨夜、沖縄の研究会から帰宅……”とのお葉書を頂戴しました。さてさて、耳順を過ぎた僕自身は、いかなる時間を生きることができるのだろうか。

（『卒業論文要旨集』35集、2007年）

④おっかなびっくりで

初代世話人の一人として、『日本教育史研究会』創設のころの思い出でもと編集子に求められ、久しぶりに古い『日本教育史往来』や『日本教育史研究』などを引っ張り出してみました。教育史を業としながらも、その場その時のみに生きている（だから恥多くとも今もなんとかこの業界に残っているのですが）、過去を憶い出すことの少ない性癖のためでしょうか、時代性を感じる印刷物を手にしながら、もうこんなに遠くに来てしまったのかとの私的感慨にふ

けてしまいました。

出発が1981年4月ですから、30代中葉で、未だ自分なりの教育史の世界を持つことができず、不安と焦りの中にあった頃です（今は年齢を重ね面の皮だけは厚くなってしまいました）、“呼びかけ人”の一人になることは、気恥ずかしさといいいのかなという思いで一杯でした。文字通り、後尾に対しながら、“おっかなびっくり”に引き離されないようにくっついていったというのが率直な処でした。ですから、私の思い出は、会の全体にかかわるということではなく、私的な会（世話人）と私をめぐる回想ということになります。

私の記憶では、1979年の川島書店刊の『学校と教師の歴史』（学術共著3）が、その発端になったのではないかと思います。それが川島からの企画であったか、初代事務局長の花井さんの会創設を見通しての持ち込みであったかは、私には定かではありません。田中征男さんも執筆に加わる予定でしたので（他の仕事との関係で結果的には不参加）、初代世話人の全てが揃うことになります。この書の共通の視点は、「現代」の教育課題についての自覚と主体性の確立を目指し、史的方法による「現代」の教育課題への接近ということであったと思います。今、読み返してみるに、若さと70年代という時代性を強く感じさせる、青くとも意気込みがほとばしる作品になっていると思います。

史的方法による教育問題へのアプローチ、研究者の現代性への自覚と主体性の形成というのが共通の思いであり、同人形式による日本教育史研究会の創設へと向かっていたのだと思います。花井さんがイメージしていたのは、歴史学研究会や日本史研究会のスタイル（ニュース・レター、研究誌、合宿形式のセミナー）だったのではないかと思います。初代同人は教育学と歴史学という二つのディスシブリンをあえて建てる、歴史学にスタンスを置いていたこともあったからかもしれません（田中さんや福沢さんは、教育学的教養の豊かな人でした。他の同

人が教育学的関心を持っていなかったというわけではありませんが)。

そうした大きな物語より、私にとっては、初代世話人との共同の作業が実に新鮮であり、刺激的でした。研ぎ澄まされた鋭い刃物を感じさせる花井さんの理論的構力、教育史研究への熱い思いを語る千葉さん、近世文書を読み解き民衆世界の広がりを示してくれる梅村さん、哲学・文学的教養を背景に人間の豊かさを語る田中さん、仏教思想への興味を喚起させてくれる福沢さん、そして壮大な歴史の語り部の石島さん、チマチマと教育史研究を所与の仕事として受け身的であった私には、まさにそこは“私の大学”そのものでした。

『日本教育史往来』の創刊号(81年4月)に「除籍簿と落第者」(その他論文1)を『日本教育史研究』の創刊号(82年3月)には、「進級・卒業判定考」(学術論文10)を書かせてもらうことができました。というより、世話人の誰かがまず書かねばということで、“気の弱い”私にお鉢が廻ってきたのだったと思います。『往来』の原稿は、“自由な研究・教育の交流の場”というイメージが出るようにと言われながらも、やはり力が入ってしまい、花井事務局長から、“往来”らしくと注文がついたことを懐かしく思い出します。

『日本教育史研究』には、複数の公開論評をつけるというまったくの新模式をとることになりました(石島さんの発案だったと思います)。これは、なかなか相互に緊張をしいる、それだけに意味のある新企画だったと思います。「進級・卒業判定考」では、埼大の同僚でもあった安川寿之輔さんと愛教大の田中勝文さんが論評を書いてくださいました。田中さんから、私の悪筆の(もちろん手書)原稿の判読が困難とクレームが寄せられました。ワープロ原稿が一般化している今では考えられないことですが。それも時代を感じさせられる懐かしい思い出です。安川さんが、彼らしく同僚としての「配慮」なしに、厳しくも適切な論評を書いて

くださったのはありがたいことでした。当方の視点のあいまいさを方向づけてくれるものでした。こうした率直な自由な論評(自由な交流)は、この会ならではのものだとも思っています。

次に第1回サマーセミナー(82年7月)も世話人として私が担当することになり、「教育史における「天皇制」」というテーマで、久木幸男さん、佐藤秀夫さんの大物とともに、当時新鋭の戦時下研究会の清水康幸さん、斉藤利彦さんに報告をお願いし、熱いセミナーになったことを思い出します。教育史学会の雄弁なリーダーの一人でもあった上沼八郎さんが、さすが日本教育史研究会ならではのテーマ設定だと評価してくださったことを思い出します。

おっかなびっくりながら、同人にもまれつつ、活動の場を与えられたのはありがたいことでした。「ゆっくり自由に話し合ったり、批判したりする研究交流の場」という、創設の趣旨は、私のような地方の大学の一人職場に近い環境の中にあるものにとっての願いそのものであり、まずは私自身が実感的にも満喫することができたわけです。そのお陰で、教育史研究者として少しずつ自立していけるようになったと素直に思っています。

世話人として運営に関わった点から考えますと、『往来』の編集では“自由な研究・教育の交流”よりは、できあがったエッセーとしての記事が多く、固い紙面になっているのではないかと反省したことがあります。自由な、萌芽的なアイデアの交流という面が、最近をよく工夫されているようですが、もっと出ていると楽しいだろうなと思っています。しかし、何よりも『往来』の楽しみは、いわゆる狭義の教育史専攻者の枠とらわれず、他領域の人々との交流の場になっている点です。編集を担当した折に、つとめて、歴史学出身の教育史研究者、歴史学者に登場をお願いし、気持ちよく原稿を頂けたことを思い出します。

『日本教育史研究』では、先にも記しました

が、公開論評をつけているのが、この会の性格をあらわしていると思います。『日本教育史研究』への投稿は、論評がつくので“怖い”という話を脇で聞いたことがあります。私が編集を担当した折のことですが、厳しい、しかし適確な論評に、当の執筆者は立ち直るのにしばらく時間を要したと周辺から伺うこともありました。日本の土壌では、学問的批判がともすると人格レベルのイガミ合いになることも多いと思うのですが、学問的な批判が批判として意味を持って交流できる自由な自立した同人的な研究会としての、一つの水準を示すことができた事例であったと思っています。この公開論評という方法はそれだけに大事にしたいものだと思います。

サマーセミナーも2005年で24回を数えるわけですが、私の自慢は、その内19回(?)は参加しているということです。最近、夏に出かけることが多くなり欠席がちですが。第1回のテーマ設定の折に「今日教育状況を歴史意識として結晶化させたもの、ないしは教育史理論の今日的解明を目指すものにしたい」と視点を整理しているのですが、どちらかという現実的課題の教育史的認識に傾斜しがちな印象を持っています。最近、教育史研究の新しい動向も多様に蓄積されていると思いますので、セミナーでじっくり検討するのも必要なことかなと思っています。

最後になりますが、この会は大学の枠を超えた交流の場としてスタートしたわけですが、セミナーの場での余裕のある時間の中での交流を介して、それぞれの大学(研究者養成)には当然のことながらそれぞれ独自の文化があることを知り、学ぶことができたことは楽しく意義深いことでした。情報革命で研究交流も組織がなくとも、一同に会することなく進められるようですが、人と人との“生身”を介在させた交流の場は、逆にますます意味を持ってくるのではないかと考えています。

(『日本教育史往来』157号、2005年)

⑤三十数年前の宿題

2003年の夏、ロッキーを超えて、横断鉄道でアメリカ東海岸への旅を楽しむことができました。思いの外の揺れの大きい夜汽車での浅い眠りの中で、三十数年前のある風景を思い出していました。1969年1月に自信の持てないままに修士論文(学術論文2)を提出し、しばらくして不安にかられ先生のご自宅に電話をしてしまいました。今はない桐花寮の公衆電話からですが、運よく先生が電話に出て下さり、とり敢えず「まあ、いいんじゃないかな」の一言を頂き“ホッ”とすることができました。

その修論の講評会で、先生は「こういう論文は、丸山眞男さんあたりがどう読むかだね」とおっしゃいました。政治(思想)史的視点から教育令の成立問題を論じた私の修論が、未だ政治史の成果をただ教育的事象に適用したにすぎない問題点を、こういう形でお示し下さったのだと思います。もし、そのとき、先生から厳しく、こういう借り物ではダメですよと指摘されていたら今の私はなかったかもしれないと、後に考えるようになりました。先生は、決して欠点を問題にすることなく、欠点を長所にする方法で、いつも課題を与えて下さる方でした。あの間接的な厳しい批判は、いつも私の頭に残っていました。いつかは政治(思想)史の専門家の目に留まる物を書いてみたいとの思いを強めていました。遅々たる歩みで、大した成果を上げることもなく打ち過ぎていったのですが、ある時、欧米政治思想史を専攻している長男が電話をくれ、「お父さん、刈部さんの本に、お父さんの本が参考文献で紹介されているよ」と教えてくれました。東大の日本政治思想史担当の刈部直さんの『光の領国』(1995年)に、天皇制の基本構造にかかわる論点に関係して、参考文献として登場していました。(学術論文17、著書1)息子自身、あのオヤジの本がとの意外の感を持ったための電話だったのでしょうか。彼には、就学前、博物館の応接室で先生に会っていただいたことがありました。その後、我が家

での会話では、先生のことを“あの車の窓のある大きなお家の先生”と呼ばせて頂いた時期がありました。つまり、小さな出来事でしたが、「丸山眞男さんあたりがどう読むかだね」と先生に与えていただいた宿題に少しは応えることができたのかなと、感慨深いものがありました。講評会の最後に、先生はニヤリとされながら「森川君、大隈重信が大隈重信になってたよ」と。このことは、今、学生や院生に何度か話させていただいています。先生は幹が大事であり枝葉にとらわれすぎることのないようにご指導して下さいました。ともすると、すぐ目につく枝葉にとられる自分を恥ずかしく思いながら、自戒の意味をこめて、後輩達に話しています。

博士課程に進んだ、5月のことでした。ゼミの後、茗荷谷の駅に向かう道すがら先生は「森川君、田中不二麿は興味深いですね。おもしろいと思いますよ」とボソリとおっしゃって下さいました。博士課程での研究課題についてのご示唆だったと思います。ゼミの場や対面する席ではなく、横に並ばせていただいて同行している時に、「言うでもなく言う」という風情で話して下さいたことを、今は印象深く思い出しています。当時は、社会構成史的方法に関心を持っており、個人研究に興味を持つことができず、先生の指摘される意味を受け止めることもなく、時間を過ごしていくことになってしまいました。

40代の中葉に、それまでの仕事を拙い書にまとめてみたのですが、何か肝心な点が抜けているような虚しさを味わうことになりました。近代日本の教育と社会の有様の枠組の表面をなぞっているにすぎないことに気づかされました。その時、田中不二麿の存在が自身の課題として浮き出してきました。近代教育制度の草創期、欧米の教育・学校を誠実に調査し、日本にあるべき近代教育を構想するも、“挫折”をしいられ、後世からは“失敗者”の烙印を押される田中。あの時、先生は「田中の光と影を描き出すことによって、日本の近代教育の未完の可能性

と現実の乖離を明らかにできるのだよ、森川君」とおっしゃって下さったのだと今は思います。先生は、「田中はおもしろい存在ですよ」とまでしか話して下さいませんでした。「何故なら…」この部分は私自身が気づかなければ意味を持たないと考えておられたのだと思います。それが先生の教えだったと思います。

非才な私は、それに気づくまで長い時間を要してしまいました（学術論文16）。それを嘆かわしく思うと同時に、やっと与えられた宿題の意味を理解できるようになったことをうれしくも思っています。

2003年の春、外国語に秀でた若い友人たちと“田中文政の研究”をすすめることになり、科学研究費を頂くことができました（学術論文30、31、32）。冒頭の旅はその一環としての初めてのアメリカ旅行だったのです。

（唐沢教育博物館十周年記念『愚徹』2005年）

⑥叱るより褒めよ!!

“七人の侍”、といっても黒澤明の映画の話ではありません。“脚下を”で、未だ自分なりの学問的世界を描くことができず、淋しい30代を過ごすことになったと書きました。その孤独、淋しさに唯一人で堪えられるほど、僕は強い人間ではありません。何程かの期待をかけてくれる先輩、友人の目線があって、その辛い時期を乗り越えることができたのです。30代の半ば、“おっかなびっくりで”に記したように、誘われて日本教育史研究会という研究サークルの建ち上げに加わることになりました。そのメンバーが7人でしたので、後にその同人7人を“七人の侍”と自称するようになったのです。彼等が僕の仕事を、その可能性を認め、発表や検討の機会を与えてくれました。おっかなびっくりでしたが、その厳しくも、温かい目線が僕を支えてくれることになりました。ヒトは淋しさに一人で堪えきれ程、強い存在ではありません。諸君もそのアンビバレントな感覚を卒論執筆中に痛感したのではないのでしょうか。研究

というか、思考を突きつめる作業は孤独なことですから、孤独に堪えなければなりません。それだけに、また他者との関係性を求めることになるのでしょうか。

その研究会の創設は1981年のことでした。四半世紀も前のことになってしまいました。その機関誌『日本教育史研究』は、とりわけ初期の号は入手困難になり、復刻版（創刊号～15号）が出るほどに、同学の世界では認められるようになっていきます。創設期の同人7人は、60代の半ばにかかり、大学を退職あるいはそれが身近な年齢になってしまいました。でも、それだけに“七人の侍”の繋がり、今も濃く、生きる力、考える力の源になっています。恥ずかしながら、昨年の10月から、教育史学会の代表理事を務めることになった時、その一人は「ご苦労様です。日本教育史研究の正統的テーマを一貫して追求して来た貴兄、当然のコースとはいえ、嬉しいことです」との便りをくれました。こうした見守りの目線の一言は嬉しく、励みになるものです。

ここで他者の目線にかかわっての余談を。大学教師の日常は、一般的な働き方とは異なっていて、なかなか理解されないものです。特に我が子からは。それほど勉強が得意ではない次男が小学校低学年のころ、風呂を一緒にした時のことでした。突然に“お父さん、ボク、大きくなったら大学の先生になる”というのです。“ほう、そうか。どうして？”“テニスをして、コーヒーを飲んで、疲れた疲れたといって帰ってくればいいんでしょう”というではありませんか。彼等にとっては、いつも夕食の席に居る父親、しかも酒を飲んで下らない話を長々とする父親の姿など、友達の家と比べて理解できなかったようです。そうした夕食の折、よくその日の“テニスの成績”を語っていたのですね。その頃、テニスと水泳に熱中していたのです。ですから、彼の大学教員についてのイメージ、理解は間違っていないわけです。それ以来、夕食の席でテニスの話は、できるだけしないよう

になりました。

次は長男が関西の大学に進み、夏休みに帰省した折の話。高校時代の友人に会った後の夕食の席。“お父さん、ケンちゃんの話だと、ケンちゃんの塾バイト先に埼玉大教育学部の女子学生が居るので、森川先生って知っていると聞いた処、その女子学生、あの、女子学生を追っかけ廻している変な先生と聞いていたらしいよ。お父さんどうなってるの？”、心優しい長男の表情は穏やかでしたが、相当恥ずかしい思いをしたのだろうと思います。僕の答えは“ウン、ウン”。

時は過ぎ、世は移り、次男は企業に勤め、長男は僕と同職（専攻は違います）の道を選びました。その長男は、執筆した論文を律儀に送ってくれます。こちらも及ばずながら、時に本を送ることになります。それにも、キチンとしたコメントを返してくれます。専門外だけに逆に勉強になるコメントなので嬉しい限りです。その彼が彼らしい表現で、僕を一人前の“学者”と認めてくれるようになったのです。他者に褒められることは嬉しく、力になるものですが、我が子に褒められること程嬉しいことはありません。世間では逆かな。親が我が子を褒めるのかしら。

実は、その本は密かに、細部に誤りもあるのですが、日本の近代教育史の概説としては自信を持っているものでした。それに重なっての評価だったので余計に嬉しかったのだと思います。書名は『教育社会史』（山川出版 2004年）、山川出版の新体系日本史という全20巻の大きなシリーズの一冊で、京都大学の畏友、辻本さんが編集を依頼され、その近代の部分の僕が担当したのです（学術共著11）。これも余談ですが、一般史学に対して教育史はマイナーで、旧版の体系日本史のシリーズに『教育史』はなかったのです。その意味でも大事な仕事でした。

長男は例によってキチンとしたコメントを書いてくれました。周知のようにEメールを使えないので、全て書面でのやりとりなのですが、

その追伸に彼らしくこんな一文を加えてくれていました。

昨晚の会話：「あのヒト、実は結構偉い学者なんだぞ」「へー、すごーい」

嬉しかったですね。テニス・コーヒー・女子学生にまつわる変な大学の教師ではなく、“学者”として認知してくれたのですから。内輪の褒め言葉に頼っているようでは仕方ないのですが、僕にとっては励みになる一文でした。というよりは、今にも継続して励みになっている一文なのです。そうなのです、僕は“学者”なのだ。と。“叱るより褒めろ”、この日本の子育ての習俗は、単に親から子へではなく、子から老いを生きなければならぬ親への視線でもあったのだと教えられました。

卒論の提出おめでとう。素晴らしい！ これも“叱るより褒めよ”の実践？

（『卒業論文要旨集』36集、2008年）

⑦街角のカフェ

ここ数年は、毎年海外に出かけていることになる。所用を済ませての自由時間の使い方が、30代中葉から始まる海外旅行の歴史を振り返ってみると大分変わってきているようだ。当初は、あらゆる事物・自然が物珍しく、時間の許すかぎり、ガイドブックを片手に、目一杯見て廻り写真に撮っていた。整然とした幾何学的な自然や都市の景観に感動し、石畳の続く小路をあてもなく歩いたものだ。

最近とはいうか、50代、98年頃を境にして、自由時間の使い方は動から静に変化したと今は実感している。12月、極寒のポーランドはワルシャワ・古都クラコフへの旅（その他論文13、15）。寒さと雪に閉じこめられ、気軽に動くこともままならず、夕方早めに広場に面した古い古い歴史を持つヴィジネクというレストランの窓側の席に座っていた。雪が降り続き、雪が積もる広場に面した窓辺には、小さな灯がともされている。ほのかな灯が雪景色に映える広場を、夕方一日の仕事を終えた人々が足早にすぎいで

く。素足に革サンダルの修道士が二人、袖に手を入れたまま、さっさと足を揃えて斜めに横切っていく。ロングコートにブーツの学生風の女性が背筋をのばして足早にすぎいでいく。買い物袋を手に婦人が背をかがめながらゆっくりと前を通っていく。その人々の一日の過ごした時間に思いを重ねながら、窓辺でボンヤリとした時間をすごしていた。不思議にも退屈することのない時間であった。

最近、そのとき以上に体力の衰えもあり史跡・美術館の探訪にこだわらなくなっている。自由な時間、街角のカフェで通りの人々を眺めていることが多い。昨年9月のスペイン旅行では、知人のマンションの前にあるベンチに座って、通りゆく人々を眺めて過ごす時間が多かった。きちんとした服装で腕を組んで散歩する老夫婦、杖をつきゆっくり歩く人。見知らぬベンチの私にも挨拶をしてすぎいでいく。歩く姿から、その人々の様々な人生を想像していた。12月のインド旅行では、バラナシのホテルのテラスやガンジス川の河段にすわって、沐浴する人々をあかず眺めていた。死が生に転生する輪廻転生のヒンズー的宇宙観・生死観に思いをめぐらして時間をすごしてきた。

僕の教育史への道は、近代天皇制と教育との関係構造を明らかにしたいとの思いに始まっていた。天皇を絶対的存在とするシステムの形成と破綻に教育は、いかにリンクしていたのかを課題としていた。40代中葉には、自分なりの説明をつけられるようになっていたが、同時に、隔靴搔痒、何か肝心な処に届いていない思いをも強く持つことになっていた。制度・システムによって人間の有り様は規定されるとともに、その制度・システムに主体的にコミットする人間の能動性についての目配りの欠如ともいうべきものを感じることになる。これは、僕自身の時間と経験の積み重ねにもよるが、それ以上に多様な魅力的な学生諸君との交わりを通して、彼等の卒業後の歩みを眺める中で、人間の複雑で多様な側面を実感したことが大きかったと思

う。

研究的関心も制度・システムの形成とその規定性の視点から、そのシステムに主体的にかかわる人間、あるいはそのシステムの下で生きざるを得なかった人間の主体性、あるいは人々の思いと歴史の結果とのずれの解明に移動していくことになる。

クラコフの広場のレストランで、広場を通りすぎる人々をあかず眺めていた頃に重なる時であった。以後、元田永孚、井上哲次郎、吉田熊次という天皇制教育のイデオログ達思想史的解明に興味を持つことになる（学術単著4、学術論文24～29）。あるいは、師範を卒業した教師達の大正自由教育から戦時下の皇民教育そして戦後の「民主教育」への担い手の「変節」を、その生きた時代の中において解明してみたいと思うようになっていた。

卒論を仕上げて、その後の束の間の自由な時間を街角のカフェに座って、通りゆく人々を眺めてみるといい。おそらく、以前とは異なる風景がそこに展開しているのではないのでしょうか。（『卒業論文要旨集』37集、2009年）

⑧記憶・怖れ・教育史

私の教育認識、歴史認識は、いかにして形成されてきたのだろうか。何故に教育史を専攻することになったのか。1945年1月3日生まれの私は、1954年小学4年生、職員室前に緊張して立ち竦む自分の姿を思い出す。その年度、突然に職員室への出入りに「〇年〇組、〇〇、〇〇先生に用事があってまいりました。入ります」と直立不動で大音声で“叫ぶ”ことを必須とされていたのだ。それ以前の「〇〇先生」とズカズカ入っていた長閑な風景は一変した。

1956年、小学校6年生の修学旅行は、1泊2日のお伊勢参り（奈良・伊勢神宮）。出発までの一ヶ月間、みっちりとする訓練を受けた。国旗掲揚塔を本宮に見立て、各組8列に整列し、

二礼二拍手一礼が揃うまで練習した。その後ろを、他校の児童がゾロゾロと観光見物風に通り返っていく中を、8列に並び一斉に二礼二拍手一礼を本宮に向かって厳粛におこなっている。何か不思議ななじめぬ違和感を、誇らしげな思いとともに心に抱く自分の姿を思い出す。

あの「場」の緊張感、あの「場」の違和感から自由になりたい無意識の意識が、私を教育史に向かわせたと今は確信している。「学制」の民衆的受容の学部卒論のテーマに始まる近代天皇制と教育という大きな課題のその先は、あの「場」の記憶につながっている。モノグラフに取り組む時、取り組んでいる時、それを自覚しているわけではない。しかしモノグラフを重ねていく毎に、あの「場」が甦ってくる。その往還の渦から、私の教育史は抜け出せそうもない。

あの緊張感・違和感のよってくるシステムの歴史性について、私は私の判断を持つことができるようになったと思っている。にもかかわらず、あの「場」から離脱できない私がいる。通説的には、戦後民主主義教育が未だに主流であったあの時に、何故に“突然”に旧教育が襲来したのか。子どもの目に、大人たちの葛藤をとまなうことのない“自然”な出現としか見えず、その“自然”が何故に緊張感と違和感を心に残すことになったのだろうか。そのシステムを“自然”な事実とした学校や地域の日常世界とはいかなるものであるのか。戦後社会と教育の史的研究のモノグラフを積み重ねる中で、何等かの手掛かりを手にすることができるのだろうか。

半世紀前の、姫路市の網干（あぼし）というその名の通りの瀬戸内べりの小学校にかかわる、あの「場」へのこだわりと怖れが、今なお、私を教育史に結び付けていることを実感している。

（『教育史フォーラム』第3号、教育史フォーラム編、2008年3月）